

修士論文（要旨）

2011年7月

社会づくりに向けた日本語学習環境デザインの試み

指導 佐々木倫子教授

言語教育研究科

日本語教育専攻

209J3004

中村鷹

## 目次

はじめに

第1章 研究の背景	3
第2章 調査概要	
2.1 調査目的と期間	7
2.2 分析対象	7
2.3 Lクラスの構成	7
2.4 調査協力者	9
2.5 クラス設計のねらいとクラス記述	11
2.5.1 参加者が主体となって活動しているか	11
2.5.2 参加者の協働によって活動が行われているか	12
2.5.3 参加者の自律的な学びが行われているか	13
2.6 Lクラス活動一覧	14
2.7 調査期間中の活動	18
第3章 Lクラスの活動例	
3.1 「テーマについての議論」	25
3.1.1 参加者が主体となって活動していたか	25
3.1.1.1 テーマ設定までの過程	28
3.1.2 参加者の協働によって活動が行われていたか	32
3.1.3 参加者の自律的な学びが行われていたか	34
3.2 Lクラスのホームページ制作	37
3.2.1 参加者が主体となって活動していたか	37
3.2.2 参加者の協働によって活動が行われていたか	41
3.2.3 参加者の自律的な学びが行われていたか	45
第4章 分析と考察	
4.1 E1の日本語学習目的	48
4.2 E1の日本語能力向上	50
4.3 E1にとって日本語学習とは	53
第5章 まとめと今後の課題	
5.1 まとめ	57
5.2 今後の課題	58

参考文献

資料

## 要 旨

日本語教育の姿は時代とともに移り変わり、研修生や留学生に対する日本語教育だけでなく、生活者としての日本語非母語話者に対する日本語教育の在り方が問題視されている。日本の地域社会に深く関わり生活する者に対する日本語教育は、社会への参加を促し、生活者自らが社会を形成していけるよう支援する必要が出てきた。

そこで本研究では、生活者の主体的な社会参加に向けた日本語学習環境設計を試みる。クラス設計者の教育観によって設計された環境で、どのような参加者が、どのような活動に、どのような方法で参加するのか、クラス設計者の意図を交えて概観し、考察する。クラス設計者の教育観によって、日本語学習環境での活動が社会づくりに向けたものとなるか、クラスへ参加者の主体性、協働性、自律性という視点から考察していく。

設計された日本語学習環境では参加者から活動の提案が出されて行われていき、最も多くの時間が費やされた中心的活動を例に挙げ、社会づくりに向けた環境であったか検証していく。

調査期間中のクラスでは、様々な活動が提案され、行われていく。いずれの活動においても、参加者の主体性と自律性が重んじられ、参加者間の協働によって進められていく。活動は、協働性が強く印象に残るものや参加者が創造的に表現できるものなどの特徴が見られる。活動を通し、参加者はそれぞれの人間関係を構築していく。これは、人間関係構築を社会づくりの基礎として考えるクラス設計者の考えによるものである。

活動は、基本的にクラス設計者によるファシリテートによって進められていくが、調査期間中、参加者が自ら主体性を放棄しようとする場面にも遭遇する。例えば一部の参加者から「教師は答えを教えるべきだ」「クラス運営者が全て決定するべきだ」と要望が出た。しかし、クラス設計者はそれら、いわゆるニーズに応えない。参加者が主体性を放棄しては、社会づくりに向けた、参加者間の良好な人間関係構築に結びつかないからである。参加者自らにとっての活動の意味を考えることの重要性が示唆された。

クラス設計者は、以上のような社会づくりに向けた学習環境を設計し、様々な活動に実際に参加していく中で、カウンセラーのような役割を感じるようになる。そこには参加者のもつ言語学習観といった考えと、クラス設計者の教育観とのずれが生じているのである。そのずれを埋めるために、クラス設計者は慎重に参加者と話し合いを始める。これが、社会づくりに向けた日本語学習環境の試みへの第一歩となる。

分析と考察から、一部の参加者の間で調査期間中に良好な関係を構築がなされた。クラス設計者は、日本語を媒介とした日本語話者同士の良好な関係構築を目的のひとつとしていたため、この限りで言えば、結果的に目的は達成された。しかしこれは、クラス設計者によるものでは決してないと考えられる。それは、クラス設計者にできることが非常に限られていることが大きな理由であろう。実際にクラス設計者が成し得る事は日本語学習環境を設計したことのみである。参加者が社会づくりに向けて、その目的を達成する要因として、環境設計だけでは考えにくく、曖昧な言い方をすれば参加者、つまりその時々状況に拠るところが大きいのではないかとクラス設計者は考えるようになる。

調査期間中に行われた活動全てが、社会づくりへ向けられていたと思われる。それは参加者の主体性、協働性、自律性を重んじるクラス設計者の考えが実践化されたものである。今後、さらに社会づくりに向けた実践研究を重ねていくことが重要である。

参考文献

- 青木直子 (2005) 「自律学習」 日本語教育学会編『新版日本語教育事典』大修館書店 pp.773-775
- 池田玲子・館岡洋子 (2007)『ピア・ラーニング入門 - 創造的な学びのデザインのために』ひつじ書房
- 石井恵理子 (2010) 「多文化共生社会形成のために日本語教育は何ができるか」『異文化間教育』32号 pp.24-36 異文化間教育学会
- 石井恵理子 (1997) 「国内の日本語教育の動向と今後の課題」『日本語教育』94号 pp.2-12 日本語教育学会
- 宇都宮裕章 (2008) 「多文化共生社会に根ざす協働学級の構築に関するカリキュラム開発実践研究」日本学術振興会平成 17～19 年度 科学研究費補助金 基礎研究 (B) 研究成果報告書課題番号:17330163
- 桜美林大学日本語プログラム「グループさくら」編 (2007)『自律を目指すことばの学習』凡人社
- 小川貴士 (2007) 編『日本語教育のフロンティア・学習者主体と協働』くろしお出版
- 金孝卿 (2008)『第二言語としての日本語教室における「ピア内省」活動の研究』ひつじ書房
- 久保田賢一 (2000)『構成主義パラダイムと学習環境デザイン』関西大学出版部
- 佐々木倫子 (2006) 「パラダイム再考」国立国語研究所編『日本語教育の新たな文脈』pp.259-283 アルク
- 塩谷奈緒子 (2008)『教室文化と日本語教育 - 学習者と作る対話の教室と教師の役割』明石書店
- ジーン・レイヴ, エティエンヌ・ウエンガー (1995) 佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習 : 正統的周辺参加, 2 刷』産業図書
- 社団法人日本語教育学会 (2009) 編「平成 20 年度文化庁日本語教育研究委託「外国人に対する実践的な日本語教育の研究開発」(「生活者としての外国人」に対する日本語教育事業) 報告書」平成 20 年度文化庁日本語教育研究委託「外国人に対する実践的な日本語教育の研究開発」(「生活者としての外国人」に対する日本語教育事業) 運営委員会 <http://www.nkg.or.jp/book/houkokusho090420.pdf>
- 田尻英三 (2009) 編『日本語教育政策ウォッチ 2008 定住する外国人施策をめぐって』ひつじ書房
- トムソン木下千尋 (2009)『日本語学研究 I 学習者主体の日本語教育 - オーストラリアの実践研究』ココ出版
- ネウストプニー, J.V. (2000)『今日と明日の日本語教育 - 21 世紀のあけぼのに』株式会社アルク
- 細川英雄 (2007) 「日本語教育における「学習者主体」と「文化リテラシー」形成の意味」佐々木倫子ほか 編『変貌する言語教育』くろしお出版
- 山田泉 (1996)『異文化適応教育と日本語教育 2 社会派日本語教育のすすめ』凡人社